

各界でユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち。その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちはいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？
第24回は、エコノミストであり、同志社大学大学院教授も務める浜 矩子さんです。

聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

経済学の女海賊

信じる道へ、迷いなき選択

山下 今日先生の元気の秘密をお伺いしたくて、楽しみにしていました。興味津々なことがたくさんあるのですが、まずはじめに、H Qの読者に独占でお聞かせいただきたいと思います。お洋服はどこでお求めになっているのですか？

浜 いい質問ですね(笑)。基本的には2軒、地元にあるブティックです。特に注文は出しませんが、これは買うだろうとめいっぱい派手なものも用意してくれています。目立ちたがりで自己顕示欲が強いパフォーマンス志向なので、他の人は絶対にしないだろうという着こなしが好き。小さい頃からお芝居や踊り



が大好きで、舞台に立ちたい気持ちがありますので、そんな趣味が服装にも影響しているようです。

山下 その先生が、なぜ一橋の経済学部になられたのですか？例えば東京大学の文学部や早稲田大学の演劇科(現：文学部演劇映像コース)という選択もあったのではと思いますが。

浜 とても具体的な出発点があります。イギリスでポンドの切り下げがあった中学2年の時です。その話題を取り上げた社会科の先生から通貨の切り下げ・切り上げのごく簡単な説明を聞いて、いったいなんのこっちゃ？というミステリーが瞬く間に謎解きされたようでワクワクしました。私は親の仕事の関係で中学1年の1学期まで4年半ほどイギリスに住んでいました。強く関心を持ち続けていた国のことだったので、よりビビッドにイメージが入ってきたのだと思います。

山下 先生は、イギリスのカッコイイ時代を体験されていたのですか。

浜 当時は日本人も本当に少なくて、イギリスの生活にどっぷり浸かっていました。そこに突然、帰国子女などという言葉も誰も知らなかった時代に日本の中学校に落下傘降下、ものすごく違和感のある世界という感じでした(笑)。帰ってきて1年後に起きた出来事をきっかけに、経済にこんな謎解きの面白さがあるならば、その全貌をマスターしたいと。その発想はずっと持ち続け、大学受験という段階になった時点でも、経済をまともに勉強できるという視点から一橋を選んだのです。

山下 経済なら一橋と思われた、その理由はどのあたりにあるのですか？

浜 社会科学らしい、今の言い方ですとりベラル・アーツらしい

浜 矩子 (はま・のりこ)

エコノミスト、同志社大学大学院ビジネス研究科教授

東京都出身。1975年一橋大学経済学部卒業。三菱総合研究所に入社し、ロンドン駐在員事務所所長、同研究所の主席研究員を経て、2002年より現職。専門は国際経済学、国際金融論、欧州経済論。国内外のメディアに多数登場し、主にマクロ経済問題に関するコメンテーター・執筆者として活躍。金融審議会、国税審査会、産業構造審議会貿易経済協力分科会特殊貿易措置小委員会等委員、経済産業省独立行政法人評価委員会委員、内閣府PF推進委員会、社団法人共同通信社「報道と読者」委員会、Blekinge Institute of Technology Advisory Boardメンバーなどを歴任。近著、『ザ・シティ 金融大冒険物語 海賊バンキングとジェントルマン資本主義』(毎日新聞社)。

生きた経済を考えるのは一橋だろうと。東大は総合大学ですから、経済学部はいろいろな学部があるなかの一つ。それに対して一橋は、“社会科学の総合大学”と銘打っている。そこがすごく面白いし、なかでも経済が目玉だろうと思っていましたから。

山下 リベラル・アーツ的な経済学というのは、今だと“総合大学でカフェテリア式にいろいろなものがある”的な考え方になってしまうと思いますが、先生の場合は経済学の学問自体にある社会科学の匂いというものに対する想いだったのでしょうか。

浜 そこがドラマであり、謎解きであり、人の営みであるというところ。今は、経済活動は人の営みであり、経済活動を行う生き物は人しかいないと、つくづく実感しています。当時は、そのような形で整理して考えていたわけではありませんが、お芝居好きで、ドラマ好きで、ミステリー好きで、物語好きであれば、そういう要素が入らないとつまらない。そうであり、かつ非常に論理性も求められる。間に飛躍のない論理の鎖をつなげていってな

“風が吹くと桶屋がもうかる”かが理路整然と説明できる。そこには謎解きの要素もあるし、理詰めでものを考える面白さがある。ありとあらゆる面白さが詰まっているエリアだと思うのです。

山下 すでに学部生の時から、思っていたところがすごいです。

浜 もちろん入ってみると、なかなか人間が見えない世界です。でもそこに人が見えると、私は思っていました。七面倒な生産関数だの、図に描けないものは経済ではないというようなことを近代経済の先生たちは教えていて、それも一生懸命に勉強しましたが、こんなはずじゃなかったと思ったことはなかった。そういう形で人間の営みを説明しようとするプロセス自体が、それなりに面白く感じていました。

人間のドラマとして経済を捉える

山下 先生の最新の御著書でも、歴史の人物が今に生きる人物像のようにくっきりと描かれています。例えばマーチャント・バンカーやジョバーたちがええ所のおぼちゃんとか成り上がりといったキャラクターを持っている。今の現実のビビッドな把握、理論の体系的な理解、そして、歴史への深い洞察という3つのレイヤーをここまで分かっている方だからこそこんな風に世界観を提示できるのだと感じました。リカードが成り上がりジョバー



山下裕子 (やました・ゆうこ)
商学研究科准教授

だったと思うと理論把握も変わる気がします。

浜 言ってみれば、どこまで人間のドラマとして経済活動を捉えられるかが勝負。マーチャント・バンカーもジョバーも、ロボットや機械ではない。人間たちのせめぎ合いとひしめき合いが、金融の世界にドラマを生んでいる。“どこにドラマがある？”“どこに人間がいる？”と突き止めるのが、経済学の仕事なのではないかと思うのです。

山下 こうした人物像はどんな時にリアルに浮かんでくるのですか。

浜 いろいろなものを読んで、その人の発言に触れてみる。学者たちの歴史に残る言葉を見ると、“この人は毒舌”とか、“ピュアな人”というように、雰囲気が見えてきます。

山下 先生は海賊がお好きですね。海賊のようないい男たちがいないのかという叫びにも読めてしまいました(笑)。オックスブリッジのエリートたちは世界に果敢に繰り出していただけじゃなくて、猛烈に本も読みますね。海賊魂が知的な領域でも大いに発揮されている。英語という言語がここまで世界に普及したのは、たんに植民地支配といった問題ではなく、言語の大海に乗り出す精神の結果という側面もあるように思います。言葉で支配するという海賊の血が流れるような舞台回しに日本の布陣は食い込めない。がんばってきた日本の女性なら、まだ舞台回しの隅っこに加わられるのでしょうか……。

浜 経済学の世界で、貿易財と非貿易財という財の区分があります。非貿易財の特徴は3つあって“動かしにくい・環境適応力が低い・壊れやすい”。これは日本男性の3大特徴でもあるのかなと。

山下 どこにでも行ってやっていける海賊とは正反対じゃないですか。

浜 それに対して日本の女性は、非常に機動的で、環境適応力があり、格別にタフ。ありとあらゆるところにいて、現地で力強く生きている人が多いです。残念ながら日本男性にはそういう面が見えない。これは男女固有の特徴というよりは、歴史的、社会的な条件付けなのでしょう。日本の男性はじっとしていれば周りで女性がセッティングしてくれるのでだんだんボーッと





なっちゃって、かたやレディーファーストの欧米では周りで男性が気配りをしてくれるため女性がヤワになっていく。徳川300年の時代から家計は奥さんがしっかりと握り、面倒なこと一切を仕切っている。日本にも昔は倭寇がいて海賊文化があったのにどんどん箱庭的

になり、戦後はまた別の意味でこのようになってしまった。こういった歴史的、社会的条件付けから、いかに我々自身を解放していくかということなのかなと思います。

山下 1971年の通貨ショック・85年のプラザ合意を経て、貿易財はどんどんグローバル化していきましたが、非貿易財は徹底的に非貿易財になりましたね。

浜 そのプロセスで、終身雇用、年功序列、護送船団、すみ分け、ぬるま湯と、どんどん言葉が生まれていった。離陸間もない日本経済が力をつけたので、その時代状況には適した形態ではあった。しかしあまりに上手く行き過ぎてしまったため、それがかつての古い知恵となった時に脱却できない。そのまま失われた10年に突入し、突然グローバル化の波に乗らざるを得ず、それで今度はリーマン・ショック。落ちていて時代を受け止める新しい知恵を作り出す間もなく、日本人たちはきりきり舞い。男性社会と女性社会は表裏一体ですから、役割認識などをじっくり考えることができぬまま動き回されているところがあるでしょう。

足並みを揃えない勇気

山下 先生はオイルショックや通貨危機の時期に多感な大学生時代を送られていますね。当時の男子たちはどんな印象でしたか？

浜 経済学部は約200人、女子は3人だったので、すごく嫌がられるポジションでした（笑）。私は高校も女子が少なかったので、

特に男子がどうだという意識はなかったですね。

山下 そのなかで先生は、授業に出ていてもぶっちぎりでしたか？

浜 基本的にそうですね。誰よりも先に喋りたいというところは、今でもなおらない（笑）。女子は事実上一人ひとりでしたから、おのずから個性が出てきたのでしょうか。

山下 純粹に経済学を学びたいという想いが入口だったということでしたが、大学に行ってから先の心配事はなかったですか。

浜 非常に厳しい環境であろうとは十分に認識していましたが、大学生としてそれが心配であるがゆえに勉強する機会をなおざりにしてしまうことは念頭にはなかったですね。

山下 一般的に偏差値を導入した後の世代は、偏差値で学校を選んでその先は真剣に考えていない傾向があります。でも本来は何を学びたくて、その先で何がやりたいかが大切ですね。

浜 おっしゃるとおり、自分が何を謎解きしたいのかが出発点。自然科学の世界でも、社会科学の世界でも、そこでどれだけのことを会得するか、考えるかが勝負であって、このプロセスを通らずにキャリアがどうという発想は、本当は成り立たないはずなのです。

山下 今の学生たちには、そういった勝負にかける精神が乏しいと感じる時があります。今日も授業で英語のDVDを見せたら「日本語じゃないとわからない」と言われてがっかりしました。



浜 それは大問題です。知的怠惰は無知を生み、無知は恐怖を生み、恐怖は暴力を生む。知って見たら何てことはないことが、知らないがゆえに怖くてしょうがない。大きく言えば、そういうところが越えていくことが教育だという気がします。

対談を終えて 海賊紳士のミューズ

対談の後、ザルツブルグで開催された国際会議に出席した。「印中の対立とグローバルな責任」というテーマで、アジアの通貨統合から、さらには海賊問題まで、話題が満載。海賊が海賊を論じるの様相を呈する。浜先生だったら、あちこちで論戦をはれるんだろうな、などと思いつながりのディナーの席で、ご一緒していたイギリス人の経済ジャーナリストが言うではありませんか。

「すごく昔のことですが、忘れられない日本の女性がいましてね、本当にチャーミングな人で、確かインシヤルはH……。イギリスで教育を受けて、英語が完璧……。もしかして、そ、それは、われらが、浜先生？「そうそう、Noriko Hama! ほんと、規格外の魅

力の持ち主です。」彼の眼がキラキラと輝いたのを私は見逃さなかった。浜先生は、間違いなくグローバル・モテ女である。

クール・ブリタニアが、愛国歌「ルール・ブリタニア!」の振りであることはよく知られている。ブリタニアは、ローマ時代、もともとはラテン語でブリテン諸島を意味したのだが、16世紀に、ブリタニアという女神の名前として、リバイバルしたのである。スペインの無敵艦隊を破って世界を震撼させたエリザベス1世のイメージが重なったものと言われる。

エリザベス1世にスペインの無敵艦隊といえ、浜先生の愛してやまない元祖海賊紳士、フランシス・ド

レイクだ。国家の形成時に、海賊と、女神が同時に出現するのが面白い。強い女のトンデモナイ命令ほど、トテツモナイ海賊魂を刺激する。女神の命とあれば、命を賭けた冒険に出かけてしまえるところが騎士道精神の発展形だったのかもしれない。

フランシス・ドレイクの祈りの言葉がある。

「主よ、我等に苦難を与えたまえ。

我等があまりにも安寧に入港したときに。

なぜなら、我等があまりにも近くのを航海しすぎたということなのだから。」

海賊紳士たちを挑発し鼓舞し続ける浜先生は、女海賊ではなく、女神なのではないから。（山下裕子）